

介護の日本語

日本の介護現場を目指す学生に「介護の日本語」を教えるフィリピン・ダバオ市のミンダナオ国際大学を訪ねた。

何気ない介護現場の会話が外国人には難しい。英語では同じ「ユザー」だが、デイケアセンターでは「利用者さん」、老人ホームでは「入居者さん」と使い分ける。

介護しながら「お国は」と聞けば国名ではなく出身県をたずねる質問になる。確立された教授法がない中、日本語教師エレン・ランズさん(24)と、日本で医療ソーシャルワーカーの



ルワーカーの経験を積み、

同大学の客員教授に就任した大本和子さん(62)が知恵を絞って授業案を作り、学生たちは手探りで介護の日本語を学ぶ。

彼らを取り巻く状況は厳しい。

日本がフィリピンの看護師や介護士受け入れに応じた経済連携協定は「日本の有害ゴミ輸出を許す」というフィリピン側の憂慮で未発効のまま。日本からは「外国人を受け入れれば介護の質が落ちる」との声も聞こえる。それでも日本のお年寄りのためにと奮闘するフィリピンの人々を知り、無性に応援したくなった。

【大澤文護】